

73

NHK朝ドラ『らんまん』の牧野富太郎と伊藤圭介

誌上発表

吉村 美香

愛知淑徳大学

今期のNHKの朝ドラ『らんまん』は実在の人物、牧野富太郎（1862（文久2年）～1957（昭和32年））をモデルとしている。牧野博士といえば、言うまでもなく日本で初めての植物図鑑『原色牧野日本植物図鑑』を著し、日本の植物学の父とよばれている。明治維新から激動の大正・昭和という時代に約1500種類以上の新種を発表、約40万点以上の植物標本を残すという、ひたむきに植物と向き合い続けた植物学者というイメージが一般的であろう。私の外祖父吉川芳秋は、少年時代に本草学を志し、1920年代（大正10年頃）に牧野博士と知遇を得、博士が94才で亡くなるまで30数年の長きに亘り交流を続けた。博士没後に博士との交流や思い出を書いた吉川芳秋の手記「牧野博士への回想」によると、牧野博士が本草学者伊藤圭介を尊敬し影響を受けていたとある。「……私が同先生を始めに知ったのは大正の末葉で、直接先生に書信を送ったのは同先生が主宰して発行されていた『植物研究雑誌』に定期購読をお願いしたのが最初のような記憶である。私の母方の祖母が、名古屋在住の植物学者梅村甚太郎先生宅へ出入りしていた関係から紹介されて牧野先生宅へ書信を送り、その後 渋谷町中渋谷六六一番地のお宅へも伺って、先生から酒やタバコをのむようでは学問は大成ないとか、いろいろと有益な話を伺った。…（中略）…其後昭和三十年頃迄書信を頂いた記憶であるが、その書簡の中で伊藤圭介翁の九十九歳にはマダ大分あると、数度書いておられた。晩年も全く衰えることのない研究意欲に感心されていたので、牧野富太郎先生の研究姿勢にも其の伊藤圭介翁の生き様は影響を与えていたのではないかと思われる。……」1939年（昭和14年）1月27日に名古屋市中区呉服町2丁目4番地において伊藤圭介の生誕碑完成祝賀式が行われた。その日の夜に祝賀式を記念して“本草学の泰斗伊藤圭介先生”というタイトルで博士がラジオ放送で講演を行った。「本日は伊藤圭介先生が、今から丁度百三十六年前の享和三年に、今の名古屋市東区呉服町二丁目四番地宮治清治郎氏方で生れられた誕生日であります、此の佳き日に於きまして、今回先生の生れられた場所へ立派な記念碑が、広く各方面からの美はしい醸出金で出来たという事は洵に此上もない御芽度い事で、国家の為に祝福に堪えない次第であります、そして先生は偉い御方でありましたのに、明治三十四年に東京で九十九歳で逝かれましてから、茲に早くも三十八年の星霜を閲、其時を回想しますとそぞろに感慨に至りに堪えません」という冒頭に始まり、「……圭介先生が偉大であったと思われますのは、人間通例、八十歳にもなると自然と物憂くなり、段々次第に退歩するものであるにも拘わらず、是れと反対に年を積むに従い益々勢いよく努力せられました、殊に晩年に物せられた論文中「花史雜記」などは明治十五年から同じく廿八年まで十三年間続けて書かれ、之れを先生の年齢で言うならば八十歳から九十三歳まで連載せられたのであります……」と晩年まで精力的な研究活動を続けたことを称賛している。また、「……先生の本業であった醫者と致しましては、尾張に在て種痘の創業普及に盡力せられたと云う事であります…（中略）…又明治初年には尾張藩の醫學講習所の開設を建言せられましたが是れが今日の医科大學の端緒を開いた様なものであります、先生は啻に本草学の泰斗であり植物学の明星であるばかりではなく洋学者としまして又醫者としまして多方面に互って國家の為に貢献せられている事を見ますと今更ながら驚くのであります……」とある。独立不羈のようにも見えた牧野富太郎博士の植物学への姿勢には、幕末の本草学者伊藤圭介の生き様が大きく影響していたことが読み取れる。牧野博士の研究姿勢に他にも影響を与えた人物については今後も調べていきたい。